



UNITED NATIONS
UNIVERSITY

UNU-IAS

Institute for the Advanced Study
of Sustainability

文部科学省拠出
国連大学助成事業
地球規模課題解決に資する国際協カプログラム (GGS)
第一期 (2015-2017)

GGS 最終報告会における審査委員会からの講評

京都大学

《参加型プラットフォームの活動による都市の災害レジリエンスの向上》

【妥当性】

- 都市のレジリエンスは SDGs においても、日本の知見を活かす上でも重要であり、2つの都市（カトマンズとヤンゴン）でプラットフォームを構築し、「災害危機行動計画」の実践的な作成過程を経てマニュアルを完成させたが、日本発信である効果をどのように議論していくのか、という点については今後も検討が必要と考える。
- プロジェクトが取り組んだ課題解決は現地のニーズに沿ったものであり、リスクアセスメントをし、対応的なことを考え教育する、という点ではパッケージとして上手くいっており、その流れを現地において構築できたと評価できる。

【有効性】

- “Emergency Action” についてのマニュアルの作成の成果は素晴らしく、ローカライズされていたため、地元でオペレーションできる高度ではない実用的なシステムは有効であるが、汎用化についてはロードマップに曖昧な点が残されているように見受けられる。
- プロジェクト実施の活動において、現地関係者の参加は得られていたが、認知水準の向上のエビデンスがどこにあるのかが見えにくい。
- プロジェクトから得られた知識や成果は発表、提供、提言として発信されるも、現地側の主体性の度合いが不明瞭で、波及効果が限定的にとどまる可能性がある。

【効率性】

- 2つのプラットフォームを効果的に構築できたため、市政府と連携していく上での機能分担も今後は必要と思われる。
- 実施国の政治的な問題から、関係者との協働関係構築に苦勞し、当初の計画通りに実施が進まなかった面は否めないが、準備を含めて短期間の中で集中的にプログラム構築がなされた。
- 予期せぬ政変からは負の影響を受けがちだが、本プロジェクトにおいては、新たに政治的意思の強いカウンターパートに恵まれ実施が順調に進むという、事業実施の在り方としては良い経験値を得ることができた。

【インパクト】

- コンパクトな災害レジリエンスのプログラムであったため、他地域や他国への展開が可能であるが、小さな範囲でレジリエンスは完結しないので、それらのつながりをどう広げていくのかも検討を続けていく必要があると考える。
- SDGsの複合的な貢献に関しての認識が不十分に見受けられたが、その貢献の可能性は大きく、期待値は高いと考える。
- 都市レジリエンスの包括的側面と本プロジェクトの位置関係、それに基づく中期的または間接的影響の分析は、他の関連事業との関係構築への道筋となる。

【持続性】

- “Action plan”の実行の検証について説明されており、国際的な水平展開とともに、日本発の科学的知見の活動促進にも寄与できる仕組み作りに期待したい。
- システムは出来たがフォローアップが必要なため、マニュアルを通用するための道筋や条件の明瞭化が必要と考える。
- 連携のネットワークは新たに形成されたものの、技術の移転、実用のためのキャパシティ育成、持続化のための制度的考慮がなされているのかが不明瞭なため、モデル作りのための試行的側面が強く見受けられる。